曰く、プロレタリアートの××は勞働者階級の貧乏と隷属、頽廢的文化的衰退を意味する。ソヴィエットロシアの實例は、かの資本主義が發達せしめた生産力を、ブルジョアーなしに統制し得るところまでには、なほ未だプロレタリアートが成熟してゐないことを立證してゐる、と。

に、自國内の共産派運動に對する彼等の闘爭は、次の如く理由づけられてゐる。「社會民主主義實現への正道は社會民主々義であつて社會民主派がブルジョア政府に參加するのは、取も直さず、實際階級力に參加することになるのだ。だから、社會民主派に向つてブルジョア第三黨よばはりして双向つてくる共産派政黨の戰術は、單に無益なばかりでなく、勞働階級には有害な兄弟ケンカもしたことである」と。また曰く「共産主義政黨は自國勞働者階級の利益をさしおいて、實はロシアの對外政策の利益を代表してゐるものであつて、モスコーから指令をうけ、新なる帝國主義のために働いてゐるのだ」と。これが社會民主々義諸政黨の共産派との闘爭に於ける理由づけてある。

（ハ）社會民主々義政黨は何れもみな、以上に述べた様な論理を指導精神としてゐる政黨である。我々が、社民黨や大衆黨を社會民主々義政黨として闘はしてゐるのは、それらの黨の幹部が、いづれもみな、多かれ少かれ、右に述べた様な指導精神をもつて各自の黨を指導してゐることが、餘りにも明瞭だからである。

（ニ）勿論、日本の社會民主々義政黨の幹部は、まだ、彼等の指導精神をまとまつた理論的體系に組み上げてはゐない。だが、彼等の行動なり、彼等の間々の闘爭に對する見解なりを分析するならば彼等の指導精神が結局、右に述べたやうな社會民主々義理論の範疇に屬するものであることは疑ひて明瞭である。

（ホ）但し、日本の社會民主々義諸政黨は、もと〳〵勞働貴族を基礎としてゐるものでなく、我黨と同じく、極めて貧困な勞働者、農民を基礎としてゐるのであるから――無論、農民の大衆と社民、大衆、民衆黨の大衆との意識程度は可なり異なつてゐるが――それらの社會民主々義政黨に於ては幹部の指導精神は、決して、大衆の中へ充分に徹透してはゐない。だから日本の社會民主々義政黨の場合に於ては幹部の社會民主々義的指導精神と大衆の闘爭力との間に、常に大きなギャップがある。殊に大衆黨の場合にはそれが、顕著に現はれてゐる。

（ヘ）だが、それにも拘はらず社民黨や大衆黨が、明かに社會民主々義的な幹部によつて指導されてゐる限り、それらの政黨は、どこまでも、社會民主々義政黨と呼ばはるべき性質のものである。わが勞農黨と社民黨や大衆黨との相異は、結局指導精神の相異以外にはない。そしてその相異こそが極めて重要なのだ。

（ト）我國の左翼陣營の中には「勞農政黨は一切社會民主々義政黨だ」といつた様な理論（？）が一部に行はれてゐるが、それは、全くのヨタ理論である。或一つの政黨が社會民主々義政黨であるか否かは、それが、「勞働者黨」であるか、「勞農政黨」であるかに又それが、合法正當であるか否かによつて定まるものではなく、――それが如何なる指導精神によつて

等かれてゐる政黨であるかによつて定まるのである。

（チ）いふまでもなく、イギリスの勞働黨やドイツの社會民主黨は、一の純然たる勞働者黨であり、日本の社民黨や大衆黨は、勞農政黨である。然も、それらの政黨が社會民主々義政黨として一括されるのはそれ等の黨が悉く黨が社會民主々義的指導精神によつて導かれてゐるが爲である。勿論、一切の勞農政黨はコミンタンのチーゼがいつてゐる通りに、「餘りにも容易に普通の小ブル的政黨に轉化する」危險性をもつてゐる。だが、その前提から、現存する一切の勞農政黨が社會民主々義政黨だといふ性な結論は生れない。現に印度には革命的勞農黨が存在してゐたし、我國勞働農民黨も勿論社會民主々義の黨ではなかつた。

（リ）現にわが勞農黨の如きは現在、なほ、かなり微力な政黨であるが、然し、社民黨や大衆黨と異なり、勞農政黨以來、終始一貫して、極めて左翼的な指導精神によつてつらぬかれて來てゐる政黨である。わが勞農黨を漫然と社會民主々義政黨と規定するが如きは客觀的事實に對する認識の錯誤か、さもなくば、社會民主々義政黨とは如何なる政黨であるかを全く理解してゐないところの、始末に惡い小ブルの謬論である。

（ヌ）以上我黨と社會民主々義政黨との相異を明かにしたが我々は更に我黨とプロレタリアート黨との相異を明かにする必要がある

五、勞農黨とプロレタリヤ黨との相異點

（イ）わが勞農黨は左翼的指導精神によつてつらぬかれたる一の左翼政黨であるが、しかしそれは純粹、プロレタリアート黨ではない。又、それに代位しやうとするものでもなく、代位し得るものでもない。

（ロ）プロレタリアート黨は、全運動の指導部であるが、わが勞農黨は闘爭的勞働者農民の政治的闘爭である。それは、勞働者農民の、資本家地主の政府に對する時々刻々の闘爭――政治的カンパニア――を最も效果的に遂行するための一の恒常的組織である、さうした目的のために最も理想的な組織は、勞農政治闘爭同盟である。だから強力な勞農政治闘爭同盟が確立されるやうになれば一切の勞農政黨が不必要になる。

（ハ）スターリンはプルジョア政治權力へのプロレタリアートとの闘爭が如何に困難なものであるかに就て、又、その困難なる闘爭を、最も效果的に遂行する爲に、如何に、全運動の指導部としてのプロレタリアート黨の役割が重大であるかに關して次の如く言つてゐる。

「私は既に、勞働者階級の闘爭の困難さに就いて、戰術及戰術に就て種種マニウバー（作戰のカケヒキ）とに就いて、語つた。これ等の條件のすべてはよしそれが、戰爭の條件以上に複雜さに於ては、況して、それ以下ではない。誰が、その地位の適任者として。幾百萬のプロレタリアに正しき方向指示を與へることが出來るか？戰爭に於ては、もし、彼等が確實なる敗北を欲しないならば、經驗の豐富な參謀本部なしにやつて行くことは出來ま

いプロレタリアートの闘爭もかゝる參謀本部なしには、うまくや